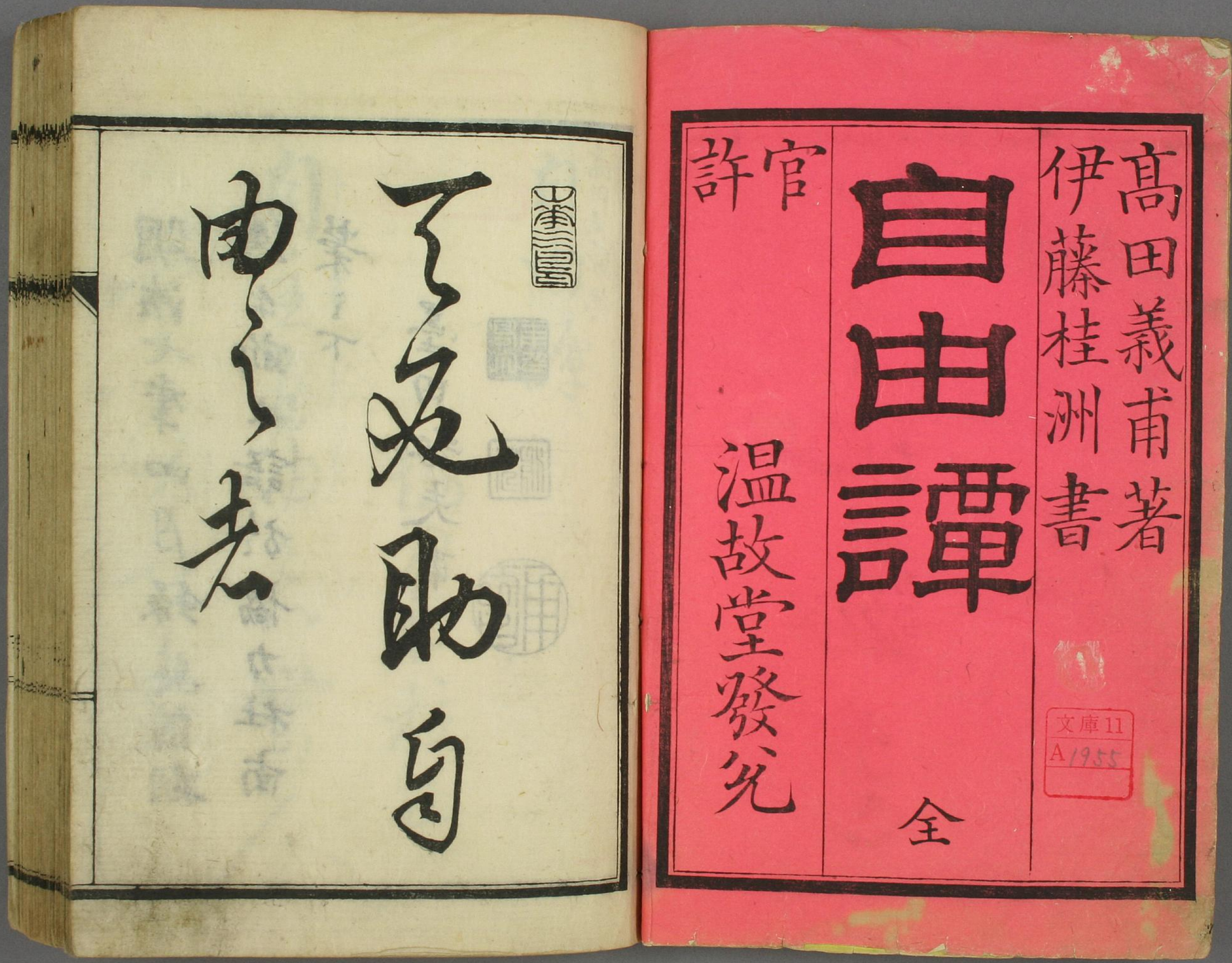
高田義甫著

自由譚

全

柳田文庫
文庫11
A1955



高田義甫著
伊藤桂洲書

自由譚

全

官許

溫故堂發兌

文庫11
A/955

明治七年四月錄英國朝
邁氏斯之語於協力社南
業之下

墨田梅夫甫

梅田藏文庫

高田義甫著

自由譚

協力社校正

自主自由世の人
の常に唱ふる事な

社ど、勉強勵精若を
思ひ、銀よりも財るうもの
らざるべき、固よりも得ざる
きをもまして、其功用

の大なる、邦家の
隆替、元氣の盛衰、
まづて人事の栄敗、
自由を得ざると

とゝ由らぐさるものゝ為
きぐそのゝ凡人生
きてい自由を得るを
目的として心思を勞
し肢體骨をゞ苦しめ思慮の年月を
て其術をゞ農
吟し新窓を穿

造化をもとめて。
地の利。鑛山の
捨査。改理や天文。
學科。百般の
でそその職業を研
究し。自己の力を基
礎として。他力を假ら
ず。獨立の心ゆまで

政大の功業をなす
成さざるべき。人民自由
をうる時は。国富み
て兵強く。日々開化
に進みて。榮名世界
に輝く。人民自由を
得ざる時は。その國貧し
く兵弱く。果は他國よ

奴と僕きゝ。驅役の恥を
免まぬ。そもゝ邦國い人
民の一箇ふ合偶して
興起るこゝの有まぬ所

謂羅化文明いそ國
人の自由をば。方ま自
ゝ若集あて。改羅花
と成ゝ者まぬ。羅化の

い自由まそ。自由の外ふ
つ其他なし。さきをバ民
他人まわ助けをうけて
成さたのハ。たゞ多分衰

て。自働て為事
い。愈ゝ。世の中を
掩ひの勢ひあ
る。勢ひつゞ邦國の法

律令をもつて人心を
きりふ。自由の權を得
させつ。其職掌の尽し
を。保護するをべいぢと
も。善美の政事と
いつべし。古人の格
言。儀範より。祖宗の
遺訓。善行嘉言。

感化の力大なるかの
ごとく、心をば、憤發
させる器械として、そ
のあるいは主要なる性
分を以て第一の材料と
なすべし如くいたるべ
しこの力を材料とせ
ざれば、若父母友を初

とゝまりて、池力の助
けて、容易く得る
事いなもの、たゞ之を
失ひたるのみにして、正味
外味方なくして、世の後
に有るべきのみ、吾等若
し得ざるの方寸
の堅く鑽錄し、肝脾

深く入るたるべし。失
冠るものたらば月
日を経べき歴るまで
益力を添るあり。

人その方を求て
自ら自を人
職事を務て息ざる
自由を得る初歩

まことの実地の夢の
なり。實地の夢とい人
この、たゞ力実事は
閲歴まこと、日用百般

若地樂夢、抑まことを
よ觸れ目を撃ちなの
夢問なりの夢。
さまゞ屋も裏も御上も

事務繁のをわ
のらも、造次の時もそ
て吾が、無度著述と
見なつ。意をこゝふ

注ぐ、此の如くの学
問を、古人名だけを
人類の教への道とぞ
稱てる、こゝまでぞ即事

業よ、職務を
盡さの捷徑あまべ、日
々進歩の功あ、て
彼の文字上よ拘ら、
浮薄多實の夢の
さい霄壤の差里の差
ひ、なる、壓抑羈制
の權あ、て、覇者の

吁ぶる、豪傑ハ、自由
を為んと奮ひ立ち
仕進むべきの、蕩
然たる聖徳の恩波
に浴せる民として、怠
惰を是分を忘れ
ば是人にして人非らず
経今廢人たるべ

勉力思索時は自
由の權を得て
苟も五誡具足して慶
人ぞよ及ぶべき愧の上
なる耻ぞ、一番化進
歩と稱せ、品格高
き國風も賤しき野
蠻とそしる、唯人

民の勤むること、惰まざるもて為ば、各自て
よ着眼し、親感実験
功を遂げ、自由を得

る我緊要なる、西
洋人の考興して、
異新法を農明し、
國を富強ま致せ元。

たゞ親族を耐て志の
び、實事を學習を
重ねる、大業成せ
ば、高位に登
る英傑の出る家ま
た位なき、種族よ
ある顯者ば、美吉利
國の景地官位倫地

例や、航海人の、古
売い日工、ゆゑ起り、北斗
博士の、休彌爾列爾、
まゝい著書、雕像

匠の、亞蘭、塼寧、合い
坊人、磚工、ゆゑ出ゆゑ、
或い木匠、織工、或い縫
匠、鞋匠、鍛冶、俳優

人歩卒小厮まで自
奮發興起せし英
雄數く盡さまで、就
中陶三大家、法

蘭西國の巴律西
と日耳曼人の薄査
と、美吉利國の空地
烏德、其西耐の深き

事、醫方の一條の美譽
あり、從來法華國
の燒器は、栗色にして
却て古雅、已往西

佳品を造ん人と、思ひ立
て、形ふ、高き利
國の名工、切磨
せ、器を觀て、心まと

進しの妻ふ
鶏せき、ゥの國まはて
秘伝を探ぐき暗る
くきべ暗き夜ま物を

常ぐの如くして、二ぐ
面を漱しつて、五色を
憔伝白色を、殺ぐる
藥を查ぐ出ぬぐて其

ゝをもを粉齎し土
器に塗りて竈にて燒
て驗しるべし功
もなく徒に薪紫草
業物に成る時を費
はやすに其果い寡若
し迫る家人の類き怨
ゝを力に成べし已律西

撓める家色たゝ或
い窓を秀守して風
雨ゝ暴さ往泥土ゝ
塗ゝ。悔ゝ助ゝも

猶ゝ猫ゝ狗ゝ吠犬
ゝ健ゝて、狐ゝ狼を過
ゝ事ゝもあるゝ。おゝもい
暗ゝ時ゝんゝと、夜中

屋敷より八町の方迄
病まして歩行まえ
僅の間ともあるを彼
も若年の重なれば
蓮頭垢面を色い土
のごとくなるを果て方
伏枕疲したまども神
魂を奪ひ地獄へ

を、火力を職人ゆせん
えのと、思ふもたく
彩業の、迂しとかるよ
買ひそむ儲貸かき

時を、木綿を抜き或
き家布の椅子
まきも壞ちて、火事よ
投ぜふ、夢も火力か

たゞ書び、繪を拭きる
度盤を書き、張て竈
下を擲ちぬ、妻子を
うゝを見て、こゝ狂
病を發し、彌び
て逃まを走りの、此史力
ゝ葉功の船て涙
ゝ人ゝけまを、已律西

愈程すしてみも窪
をび重けるよ、火石破発
しを砕き、土器の面に
黏着し、皆貴品多

らぶして、是まで盡せ
し功勞も一時に空しく
なるを程び、妻子の責
めを免れのこと。鄰の人も

愚なるとて、笑ひ嗤ふ
ものもあり。然れども
巳律西方、尚
も数年の星霜を。

茶料の試筋より費
まして都て十有八度
まで、始て土器陶器
を稽し、その器を鑄

ぐ事を問ひ、こゝ花
もゝもまぐ是きわとせ
ど、器上よ墓せるもの
圖畫よ、少精巧をま
ゝめんと、鳥獣蟲魚を
井茶未集めて是を写
さして、大工夫を凝
しぐの、筆よ玉妙を極

めるて、世の名工と稱
せらるる又日耳曼の
薬査家、陸質の園
器をつくんと、多年
試驗を積しのどさう
ふ功効のたのもしきの
地もてぬ事よりも看
出せり、百薬薄査家の

假髮つくるわ重宝
えを、張屋考る問ひ
くる、假髮の中ゝ
うるくるわ是を整理
きの為に用る白粉
あるを申る、こゝ社で一種の工
なるを、ゆを養生さ
あるべし、一部の須書出

んと思ひまうけし土
もやと直に試驗したる
に、果して一種の白土を、
ふとり得て見るに其

功業を奏しけるに、又
美吉利國の空地烏
德い陶器のもてあそ
んでの自國に於て色

吹、民器を製し得ぬ
事を、深く憂ひて、
いとまを、費やせんと
除脩をもて、製煉術
を學び、多年力
を尽し、一種の黒
漆、白色を除
き、貴を、法ひて看出

しろきまさりたるいとの色
純白よ光亮きて、被
瑠璃尋しき陶器を
び創めて造り出
ることもまた英國い上好
の磁器を他國より覓
めしの空地烏徒て
び出て没て磁器猶

國用に、庶る所の他
國まで、輸し出の業を
極めて、この陶工の三
名を、初まわして絶

俗の、天才奇術ある
たとへば、黽勉刻苦忍
耐の力より出ずる功ぞ
うしたとも天才ある

とても。自脩の功に由らざれば。千藝萬伎何事も。玄妙の地位に至らざれば。才智を天より受るとも。之を全くすることハ。自己の力によらざれバ。たゞ天才を恃まずて。

我力をべ尽さず少なきして技を作
るべ或い画を繪き其
才の衆より勝まて都

名を一時に霊ひ龍
袖ぞと稱ってもも
おそそのの聲譽を
失ひ蠅馬より低く碌

とうて学を修ふ。
唯天才をたのしつて。
若難をしいぎ試驗
を経ず。唐学積まぬ
ゆゑ。朝晩巻
よりて書を讀て。或い
電筆博士となる。或
い器學ゆゑ通暢。許

多の暑を防ぐ
業世に名を家
の世少時の興の作
例を先の業の
大の業の成る事
らまぐ、を待て少年
風来ハ才能知識
童の、ものの徴候を

らぶて、老大善慶
の年の老と、つゝしゝ懼
まて童子の輩、偏
に刑勵勉力しそ
の工夫をなたのこ
そよ、又能賢たるも
愚もその愚を屈せ
ずひたすら人力

を竭べば、敏鈍と
を切を捨て自由
の權を得べし。
少年の時速まる業

ふ志向を立ざれば肉
膳子の路より塞まる
邪蹊に陥る一若
事をば目的と

志四を立てて定め
たゞ後山大河の淪
とも、撓まず屈せ
ず中止せず、こゝに我
実地の修学問を
奮起進の事業
極所まで達して志
願の力い上て帝国

ゞて卵殼とそまりものと。
彼神夢者もえび
しの見、みを後悔志
志あまべ、この所ゞ便
宜あるとゝ。六の語
を常の脾膏し
て、志四を定め方
時分をつゝばそまふ

願、費、つぐる事なの
ゝ、倫羅邪の天
將吉祐安の、武勇
絶倫なる事、忍

志の剛毅なる由
を、將もまた法國
の、彼の拿破崙の如
くなる生まれ性弱

ひ[illegible]を[illegible]て。紙[illegible]
と[illegible]ふ文字をば。[illegible]
[illegible]を[illegible]きて。[illegible]と。
[illegible]習[illegible]。[illegible]試るの。

[illegible]を[illegible]稱一
[illegible]。み傘[illegible]波[illegible]の格
[illegible]の[illegible]初[illegible]劇
[illegible]の志向[illegible]を

以て親しむ時い心志を
主張し功業を成
独り事を知るべ
し、美國の学林登

き職分の言を護
方今学校盛
に開き職業を
要さんと願る志向

厚くして、恩を德
恩財の、力を恭
して事も、於言自大
の心なく、野節の命を

下劣なる、嗜慾もまた
なるあらぬ、を捨て
大形なる時は、その勇
決を命、後晨、古

雷乱よ奉ーと、輔
相と尽て紹慮あ
る、格調宛も異れ
らず、其志誠実高
く、おのぼるを
彼話東の風あ
る、斯て衆徒を一
人、魚祐傳ふ

曠世の、高傑ありて
いとゞたまき、世の人常
ならず節操、拘たるぞ
といふべけれど、さて

大人高傑い、為ル事
を軽人せず、志を看
脚注言して、實地
強強功を積み、大功

業をなさぞこの試
み名よ空林登ハ軍
陣多事の際も
鍋釜麺や糧
なのや歩兵の戦ふ
ふまで一百事自
拍揮なして細大漏
さ事ぞなき又西道

をたとして。借債を
いとゝ懼るまゝに。たゞも
敵國をたゞれだとて。一銭
どもも他のえぬ我。

掠奪せ事絶て
たゞ、貧して書牘を
他に寄せて。負債を
償ひ得ぬときい。債

主の顔をむけ難
とゝろを元列爾賛
美して、鐵心腸の人
まして、君仕債を懼る

その一語、心を動かすも
大なるあり、三十度の
其間、涙を推まき
衣を濕して、腹で奏せ

兵馬の功も世美を
よく好のぞまんこころを
古集の美雄を更し
冊多くもかく

玉山直城樸の言は
うたがたしあるとそい
ゝ嘆ぜたりを
又拿波嵩も蓋世の

才力をもて少大の官
事まつりごとを注
ぎ或いは馬を猜閲
しぎまつりのつかさを廻形

しるもひ小渇者の接
第より而、四事を畫
ものをとりて其
が深庵及ぶ種

夢に毋をそびえたるごと
あるの文書を古極
て。たとひ横末の事
ともに海を為たるか

しるべ。法師聖東も
細事をそびまでて自
管理して。家財の費
用度末も。常に度こ

論ずる時は、厳しく
是を捨置せり。こゝを
産業の本りをもて、
過治を警め、節倹
の形ひ缺ぬ為ぞとよ。
その他窮理の修業
も、西洞極沐の事
物より、費の所せざる之

味を有し。生薑多
く重力の。理を窮め
と若田せしの。樹菓
の隙をを見そうう。

急そ理を豊明し
学をを雅い水上の石
鹽たのしそその泡
沫のを色燦燦ら

より、光線、斜に射の処
を、悟るべし。仏柱、温い
横ざまに、力、きまる。知
時の条を、視て、徒懸
格を、工夫、奇偏
庁い、海藻の、浮ぶるを
見て、新世界の、ひきま
あるを、事を、知彩

学ぶ者は大事をば、
閑情豊敏なる人に、
為光信を費さば、
彼の亞陸南の海
云ふ、為光信を遣化
の元金、能く光信を
用ゐ、為宮を以て
せりと、理学の者深の

言葉も、自然に成しめる
の外なり、又懶人の所
上を、妖魔鬼の
工場とする俚言も
あるべし、實は光
陰を奪ひ移して、君
臣を老ぬる所なるべ
迄まで、高志の心

かゝ浮びて、諸惑の、
魔鬼縱横に起り
来て、禍害百方に
吹惑教誘ときて、
遂に、僧の、末時四
末時の、先徳、法を実地
に、親魔、幸の縁り
に及びるまで、為進歩

を覺ゆ。況んや
晝日從事して刻勵
鑽究する時、產業
全く怠り、家の

福利を潤す時、奉
愚を遂て聰明を化
して自由の權を伸
抑功業い智識も

能く失敗度をの
まれ得る事多きも
ひたすらに禍難人の
善悪ぞと自ひそ

寄を奮ひ金進す
る時は自由の地位よ
り人を彼衆人の意
惑たる偶よ齟齬を

る事あまたび。自然の
不幸なる。命數を更
ぶて生まれ来りしを
ひたすらと思ひ悶へ侘び。

人の逝てこい毎まを養
命をたゞきき悲むい。
自然その力を豪る所。
成孫の言ふる世の人は。

英の國士

声を鳴らし怨
言を吐けれバ請ふ正
也我ハ功労ある人の
遺てられたるを見れバと

云ふハ要ハ生計の
立得ねバとつてよ所
ゆゑなる、辨理の失誤
まきものか、防道なき

よりて起わるゝ事なり
寒さを飢寒さを固よ
わ苗の生ぬる心
地よ肥田なきれば
然るを芸に任せ
て、穂ろぐで稽めぞ
福を、天漬と思ふ愚
さよ。たゝひ学問の人

とも。或は世を豪の
人を用て。國家の用を
なさんとすれば。僅に一車
を牽ものゝ。彼碌碌たる

世人も。其功いたつて劣
なれど。吠狗の用い嗜狐狸
なるを。大なりとの論を。
肝に銘じて監べし。遂

ゑ国由の権を以て開
化の功を奏ず彼
支那国い土地廣く
人民多く物足りて

ゑ地開けず国富な
きゆえ天保の末年
英の師ゆきうちまねて
国辱うけしい堂

さて、百万の兵の大軍
よ。一箇の男児あれ
らば、富強の基なる
自主の権、自由の功

を其民の、志気なる
故を由らざるこの一美
國主の維持多利益弱
者の老婆のさるれ

きど。國富て兵強く
して。能く大國を制せ
しい。是他事無ば
人民の自由を保ふ

よ。能く法度を
而深の法度い民を
ちとして。君主の稱い
私の有ふ無ば。

天の辭言くだす君い御
者まして民を車きり
ち乘まる宮家
もまる似まわ北玄南

来東之而神御者
男ままたれど今
き宮まあ出まれわ
まきび君主の命今

まゝ卿民の命令を
君民に立ちて回戦
令以戦力其職を各
盡して有ちる自
由の力自主の權集り
漸て其立国體
なるべし今日の富強を
ことゝ仕て今世に

皇國の人民い器毅
忠直節義を進む天質
なるまゝ古聖賢の自
奮起勃興し偉勲
巨績を樹てゆるふ
英雄拍手を屈ぐる
その事蹟い麿くと
載せて史冊に在る

ゆゑ。編こ口碑を傳
まて。都冨野煙の
茶話ふ。常ふ唱
ふ事なまバ。愛ふ

都ゝ話を費ゝ。七
百年來蒔寂の
國家の元氣ふ。
發して今時の榮勢

を奏せ
まゐらす。先哲後賢
跡を踵ぎ、忠魂義
膽集まりて、竟に奏せ

し功奏まゝば、後進是
を継ぎ、盡心竭
力若し射て、実地
試験の功を遂げ貴

賤貧愚昧の差別なく、自由を有ち自
主を得て、文明開化
のそ基を成すに天

り蘭学開け、我
皇國の威德をひたす
物の御徽猷もろ
ともに、五大州裡の蒙

邦ふ、輝さん、を要
務なれど、但幼稚ハ
軍を、実地ハ試
験のうちなれば、小學
校ハ八學一初歩
の行をば啓きほて、
他技ハ生ればの目的
を立、正路を履て進

行(ゆく)ゝ自由の階(きざはし)を登(のぼ)るべし

桂川伊藤倩書

48-13797

諸國弘通書林　温故堂　甲府八日町十六番地　内藤傳右衛門板

東京　稲田佐兵衛
同　山中市兵衛
同　北畠茂兵衛
同　太田金右工門
同　江島喜兵衛
同　石川治兵衛
同　東生龜治郎
同　水野慶治郎
同　村上出店

東京　中外堂梅治郎
同　鈴木喜右衛門
同　北澤伊八
三府　博聞社
大坂　柳原喜兵衛
同　岡田茂兵衛
同　梶田喜藏
同　書籍會社
同　書林會社

西京 村上勘兵衛
同 杉本甚助
同 勝村治右工門
同 大谷仁兵衛
尾州 片野東四郎
同 美濃屋伊六
同 栗田東平
同 美濃屋文治郎
静岡 須原屋善藏
岐阜 玉井忠造
沼津 小松浦右工門

信州諏訪 藤屋機右工門
同 湖月堂
同松本 高見屋甚左工門
同高遠 矢島金八
甲州勝沼 萩原榮造
同韮崎 島屋武右工門
甲府 功力孝太良
同 武井豊兵衛
同 山本昌祖
同 島屋吉右工門
同 西川庄右工門

東京 協力社藏版

神武天皇紀元二千五百卅四年
明治七年第四月上梓

甲府書肆 八日町一丁目 内藤傳右衛門

010190532785